

〔『篁物語』の総合的研究（2）〕

承空筆『小野篁集』による 校訂本文作成の試み

中 村 一 夫

『篁物語』『小野篁集』は主に江戸初期に書写された『篁物語』枡形本（彰考館蔵・甲本）によって読まれてきた。『日本古典文学大系』（岩波書店）に所収のものをはじめ、これまでに公刊された各種の校注本や校本の類も、同本を底本として本文が立てられている。

しかし、2002年に鎌倉時代後期に写されたとされる承空筆『小野篁集』袋綴本（冷泉家時雨亭文庫蔵）が新資料として公開された。江戸初期に写された彰考館蔵甲本・乙本や宮内庁書陵部蔵本と近い本文を有するものの、細部にはなお検討すべき相違点が存在する。承空本についての研究はまだ緒に就いたばかりであり、これの詳細な調査、考察や残されている伝本との相対的な関係性の解明などが急務であることは言うを俟たない。

そこで、この鎌倉期書写の承空本を読むために、これを底本とした校訂本文を作成することとした。本文の質をうかがう伝本間の異同の状況を考慮することは必要であるが、まずは書写年代の古いものを読むべきであり、そのための校訂本文が必須であるとの判断からである。本文を整えるに当たっての方針については、すべて以下の凡例に記した。

凡例

- 1 本文は、承空筆『小野篁集』袋綴本（冷泉家時雨亭文庫蔵）を底本として用いた。文意不明の箇所については、『小野篁集』（宮内庁書陵部蔵）、『篁物語』枡形本（彰考館蔵・甲本）、『篁物語』袋綴本（彰考館蔵・乙本）を参照したが、底本の本文を尊重し、手を加えないことを原則とする。
- 2 読みやすさを考えて、底本の片仮名漢字交じりの表記を平仮名漢字交じりに改めた。またエピソードごとにまとめて、それぞれに小見出しを付した。
- 3 本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、仮名遣いを歴史的仮名遣いに改め、適宜仮名に漢字をあてた。宛字は普通の表記に戻した。字体はすべて通行のものとした。

- 4 送り仮名は現行の基準に従って補った。
- 5 校訂者の理解するところに従って、濁点を施した。
- 6 底本に使用される踊り字は用いず、文字を繰り返して表記した。
- 7 段落に分けて改行し、句読を切り、会話や心話などを鉤括弧で括った。
- 8 原本の表記はルビとして記した。本行とルビを辿ると、承空本の本文となる。
なお解釈の難しい箇所については、ルビに「ママ」を付し、原文の形を残した。
今後の課題とする。
- 9 原本になく、校訂本文に追加した箇所はルビに「・」を付した。
- 10 和歌の詠者を〔 〕に括って、歌の冒頭に示した。
- 11 彰考館本や書陵部本と校合して掲げるべきだと判断した異同を稿末にまとめて示した。主にいわゆる自立語の異同を取り上げている。

参考文献

- 財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』(2002 年)
平林文雄・財団法人水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字文責・総索引』(2001 年)
平林文雄「承空本片仮名書本『小野篁集』対校本」(『文学研究』vol.95、2007 年 4 月)
安部清哉「『篁物語』承空本(『小野篁集』)に関する研究課題」(『人文』7 号、2008 年)

小野篁集（冷泉家時雨亭文庫蔵・承空本）

第一部

一 篁と女の出会い

親^{おや}のいとよくかしづきける人の娘^{むすめ}ありけり。女のする才^{ざい}¹のかぎりしつくして、
今は「書^い読^まません」とて、「博士^{はかせ}にはむつかしからん^{ことほ}²人をせん」とて、異腹^{ことほ}
子^このかみ、大学^{だいがく}の衆^{しゅう}にてありけり、異腹^{ことほ}なれば、うとくて、「あひ見^みず」などあ
りけれど、「知らぬ人^しよりは」とて、簾^{すだれ}越^こしに、几帳^{きぢょう}立^たててぞ読^よませける。

この男^{おとこ}、いとをかしきさまを見て、すこし馴^おれゆくまに、顔^{かほ}を見え、物語^{ものがたり}
などもして、文^{ふみ}のてう³いふ物を取らせたりけるを見れば、角筆^{かうひち}⁴して歌^{うた}⁵をなん
書きたりける。

〔篁〕中^{なか}に行く吉野^{よしの}の川^{かは}はあせななん妹背^{いもせ}の山^こを越^こえて見るべく
とありければ、「かかりける」と心遣^{づか}ひしけれど、「情^{なさ}けなくやは」とて、

〔女〕妹背^{いもせ}山^かかげだに見えてやみぬべし吉野^{よしの}の川^{かは}は濁^{にご}れとぞ思^{おも}ふ

又、男^{おとこ}、

〔篁〕濁^{にご}る瀬^せはしばしばかりぞ水^{みづ}しあらば澄^すみなんとこそ頼^{たの}みわたらめ
女、

〔女〕淵^{ふち}瀬^せをばいかに知^しりてか渡^{わた}らんと心を関^{せき}⁶に人の言^いふらむ

男^{おとこ}、

〔篁〕身^みのならん淵^{ふち}瀬^せも知らず妹背^{いもせ}川^しおりたちぬべき心地^{こゝち}のみして
かく言^いふ程^{ほど}に、人憎^{にく}からぬ世^よなれば、いとけふとくなくかりけり。

二 師走の月夜、篁の思い

師走^{しはす}の十五日^{も ち ころ}頃、月^{あか}いと明^{がたり}きに、物語^{ものがたり}しけるを人^み見て、「誰^{たれ}ぞ。あな、すさまじ。
師走^{しはす}の月夜^いともあるかなん」と言^いひければ、

〔篁〕春^{はる}を待つ冬^{ふゆ}の限^{かぎ}りと思^{おも}ふにはかの月^{つき}しもぞあはれなりける

返し、

〔人〕年^{とし}を経て思^{おも}ひも飽^あかじこの月^{つき}はみそかの人^{ひと}やあはれと思^{おも}はむ
かく言^いふ程^{ほど}に、夜更^{よふか}けにければ、「人^{ひと}うたて見^みむもの」とて、入^いりにけり。男^{おとこ}は、
曹司^{さうし}にとみにも入^いらで、囁^{ささ}きありきけり。

さて、あしたに、久^{ひさ}しう書^{ふみ}読^よませざりければ、父主^{ちぬし}、「あやしう篁^{たかむら}が見^みえぬかな」
と言^いひて、呼^よびにやるに、おどろきて⁷、例^{れい}の書^{ふみ}かき集^{あつ}めて教^{をし}へけるまになむ、
この女^をのみ心^{こゝろ}に入りて、僻事^{ひがこと}をのみなむ、しける。かう教^{をし}ふる中に、角筆^{かうひち}⁸して、
「かやうの物^{もの}の書^{ふみ}⁹は、僻事^{ひがこと}つかまつるらむ。この頃^{ころ}はもの覚^{おぼ}えずや。

〔簠〕君をのみ思ふ心は忘れず契りしことも惑ふ心か
 返し、
 〔女〕博士とはいかが頼まむさとられず¹⁰ もの忘れする人の心を
 又、男、
 〔簠〕読み聞きてよろづの書は忘るとも君一人をば思ひもたらむ
 かくて、この男は、てふくみをぞ常に作りかへりける。

三 稻荷詣にて

さて、この女、願ありて、如月の初午に、稻荷に参りけり。供に人多くもあらで、
 大人二人、童二人ぞありける。大人は色々の桂、二人は同じ¹¹ をなむ着たりける。
 君は、綾の搔練の單襲、唐の薄物の桜色の細長着て、花染の綾の細長折りてぞ
 着たりける。髪はうるはしくて、丈に一尺ばかり余りて、頭つきいと清げなり。
 顔もあやう世人には似ず、めでたうなむありける。男の童三四人、さてはこの
 兄とぞありける。まほ¹² にはあらねど、先立ち遅れて来ける。詣でざまに困じ
 にければ、兄いとほしがりて¹³、「簠にかかり給へ」とて寄りければ、「いで、い
 ないな」と言ひて、道中に居にけり。

さる程に、兵衛佐より¹⁴の人、容姿清げにて、年二十ばかりなりけるが、詣
 であひて、かへさに、女の道に居たる、「あな苦し。かくてやは出で立ち給へる」。
 もの嫉みして、男申すに、「かもは車¹⁵作りて、乗せ奉りて¹⁶、このわたりなる
 きさきの峯¹⁷に据ゑ奉らむ。女の事¹⁸には大王、帝には誰をかと」言ふ程に暮
 れにければ¹⁹、破籠探して食はせんとするに、この佐をやりすぐす。この男、休
 むやうにて、降りて、

〔兵〕人知れず心紬の神ならば思ふ心をそらに知らなむ
 返し、

〔女〕社にもまだきね据ゑず²⁰ 石神は知ること難し人の心を
 又もおこせけれど、この兄、いそがしく、車に乗せて、率て去ぬ。

この佐、人をつけて、「いづくにか、率て去ぬる」と見せければ、「その家」と
 見てけり。あしたに文あり。「神の教へ給へしかばなむ。さして奉る。かの石神
 の御もとにて、今日あらば」。文を取り入れて見れば、この兄、出で走りて、「父
 主も聞き給ふに。いとの騒がしく。この童はいづくから来たるぞ。いづれのす
 き者の使ぞ」と言ひければ、「御文は奉らせつれど、昨日いませし主の、『いづ
 れの使ぞ』との給を、うちからは翁びたる声にて、『何事ぞ』などの給ひつれば、
 わづらはしきになん、参で来ぬる」と言ひければ、「とうめの童」と言ひて、又
 のあしたに、「昨日の御返。たびたび、いとおぼつかなし。この童の、あとはか
 なくて参で来にしかば。

〔兵〕あとはかもなくやなりにし²¹ 浜千鳥おぼつかなみに騒ぐ心²² か

この兄、大学に出でにけり。樋洗童、取り入れて奉る。文をも取り、「大学の主もぞ見つくる。近からん、人の家に据ゑよ」とて、「昨日も見しかど、いさや。

〔女〕玉鉦の道交ありし君なればあとはかなくなると知らずや」

見て、「ざれたるべき人かな。うたて、まがまがしうもいりたるかな。いかに言はまし」と思ふ。時の大納言の子なりけり。「あとはかななしと、誰も。道にこそ入り給へりしか²³。

〔兵〕しばしば²⁴にあとはかななしと言ふ事も同じ道には又もあひなむ」

また、これを例の童、もて来たり。兄、道にさしあひて、「今、これより」と言ひて、やりてけり。「かくなむ」と言へば、「例の心肝もなき童かな。先に気色あしう言ひけむ人にや取らすべき。この稲荷にて、まならひものしげに思へりし者ぞや。男よりの物ぞや。そもそも、御返り」とりてやりつ。御返りにくしと思ふもののやに、兄、出であひて、「御文奉り給ふ人は、夜べ男に盗まれ給ひにしかば、求めにゆくぞ。もし、この御文給へる人とも知らず。そち率てゆけ²⁵」と言ひければ、しりへ答へに答へて、走りにけり。

「さもあらん」と言ひて²⁶、文もやらずなりにけり。女、兄の謀りたるとは知らで、「あやしう訪れぬ」と思ふをり。この兄、例のごとあるなり。「道あひ人の、知りも知らぬ人に、文通はし懸想じ給ふ人の御心にこそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人²⁷こそよからめ。許され給ひては²⁸不用ぞ」など言ひければ、「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん」。「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うし。思はずなり」など言へば、妹いとおしうて、「なにか目にちかざらん人を、しひも見給へと思はん」とて、入りにけり。

四 深く心を通わせる篁と女

例の書読みて、「内侍になさん」の心ありて、親は書を教ふるなりけり。文通はしにはしらたれど²⁹、この兄、心をまどはして、思ひ出でられけり。男、言ふやう、「かく思ひ出でられ、限りなき心を思ひしらずして、よそなる人を思ひ給へるこそつられ。

〔篁〕目に近く見るかひもなく思へども心をほかにやらばつらしなと言ひければ、「人の御心も知らずや。

〔女〕あはれとは君ばかりをぞ思ふらむやるかたもなき心とを知れ重くあるや³⁰」と言ひければ、すこし心ゆきて、（注：「る」見せ消し「な」傍記）

〔篁〕いとどしく君が嘆きのこがるればあらぬ³¹ 思ひも燃えまさりけり

かく言ひて、心は通ひけれど、親にもつつみ、人にもさはりければ、心とけて久しくも語らはずあり。されど、いかでか入りけむ、この妹の寝たる所へ入りにけり。いと忍びて、また夜深く出でにけり。たまさかに入りは入りたりけれ

ど³²、逢ふことは難かりけり。常に向かひにければ³³、夜は逢はず、なかなか心はそらにて、「いかにせん」と思ひ嘆きて、

〔簗〕うちとけぬものゆゑ夢を見て³⁴ 飽かぬもの思ふ頃にもあるかな返し、

〔女〕みを寝ずは夢にも見えじを逢ふことの嘆く嘆くも明かし果てじをかく夢のごとある人は、妊みにけり。書読む心地もなし。「例の障りせず」など、うたてある気色を見て³⁵、この兄も、「いとほし」と見て³⁶、人々³⁷春のことにやありけむ、ものも食はで、花柑子・橘をなむ願ひける、知らぬ程は、親求めて食はす、兄、大学の主するに、「皆取らまほし」と思ひけれど、二三ばかり、畳紙に入れて取らす。

〔簗〕あだに散る花 橘の匂ひには緑の衣の香こそまさらめこれをきこしめすなればなむ。返事に、「御懐にありければなむ、

〔女〕渡りとや³⁸ 花 橘を嗅ぎつれば緑の香さへうつらざりけり」

五 引き裂かれる二人

かかゝることを、母おとど聞き給ひて、ものもの給はで、うかがひ給ひて、向かひ給ひたりけるを、手を取りて、引きもていき、部屋に籠めてけり。これを、父主聞き給ひて、のどかなりける人なりければ、「男もかしこき者にて、女 幼き者にあらず。さしたるやうあらむ。なほ許し給ひて、の給へ」とありければ、「おのが身を思ふとて、の給ふに」とて、いよいよ鍵の穴に土塗りて、「大学の主をば、家の中にな入れそ」とて、追いければ、曹司に籠りあて、泣きけり。妹の籠りたる所に行きて見れば、壁の穴のいささかありけるを、くじりて、「ここもとに寄り給へ」と呼び寄せて、物語りして、泣きをりて、出でなまほしく思へども、まだいと若うて、ねたりたべき³⁹ 人もなく、わびければ、ともかくもえせで、いといみじく思ひて、語らひをる程に夜明けぬべし。男、

〔簗〕数ならばかからましやは世の中にいと悲しきは賤の緒だまきかへ返し、

〔女〕いささめにつけし思ひの煙こそ身を浮雲となりて果てけれと言ひて、泣きあへりけり。

六 女の死

夜明けにければ、曹司に帰りて、この女食ひつべきやうに⁴⁰、物をかへて、持ていかんとするに、心まどひして⁴¹、足もえ踏み立てず。もののおほえざりければ、むつまじう使ふ雑色を使ひて、「ただいま心地あしうて、え参り来ず。その程これすき給へ。ためらひて参らむ」。女、穴のもとにて待つに、かく言ひたれば、

〔女〕誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとどめめ

取り入れず。歸りて、「かくなん」と言ひければ、かしこうして、またまた行きて見れば、三四日物も食はで、ものを思ひければ、いとくちをしう息もせず。「いかがおはします」と言ひければ、

〔女〕消え果てて身こそはるかに⁴²なり果てめ夢の魂まで⁴³君に逢ひ添へ返し、

〔簀〕魂は身をもかすめずほのかにて君まじりなばなににかはせむとて、よろづの事を言ひて泣けど、答へせずなりにければ、「死ぬ」とて泣き騒げば、声を聞きて、ときあけて見れば、絶え入る気色を見て、まどひ出でて⁴⁴、ほかの家^{いへ}に往にけり。親出でて後に、出で、率て入りて、見れば、死にて臥せり。泣き呼べど⁴⁵、かひなし。

七 女の靈魂と簀のその後

その日の夜さり⁴⁶、火をほのかにかきあげて、泣き臥せり。あの方こそめきけり。火を消ちて見れば、添ひ臥す心地しけり。死にし妹の声にて、よろづの悲しきことを言ひて、泣く声も言ふことも、ただそれなれば、もろともに語らひて、泣く泣くさぐれば、手に^て触らず、手に^てだにあたらず。懷にかき入れて、我身のならんやうも⁴⁷、臥さまほしきことかぎりなし。

〔簀〕泣き流す涙の上にありしにもさらぬあはぬ⁴⁸浮かべる

女、返し、

〔女〕常に寄るしばしばかりは泡なればつひに溶けなむことぞ悲しきと言ふ程に、夜明けにければ、泣く⁴⁹。

親は捨てて往にければ、とかくをさむることは、ただこの兄ぞしける。人はみな捨てて行きにければ、兄⁵⁰、従者三四人、学生一人して、この女を死にける親を、いとよく払ひて、花・香焚きて、遠き所に火をともしてゐたれば、この魂⁵¹、夜な夜な来て語らひける。三七日、いとあざやかなり。七日⁵²、時々見えけり。この男、涙尽きせず泣く。その涙を硯の水にて、法花經を書きて、比叡の⁵³七日のわざしけり。その人、七日はなし果てても、ほのめくこと絶えざりけり。三年過ぎては、夢にも確かには見えざりけり。なほ悲しかりければ、初めのごとしてなむまかせたりける。妻にも寄らで、一人なむありける。

第二部

一 篁と右大臣の娘の結婚

時の右大臣の娘賜へと、文をおもしろく作りて、内に参り給ふとて、御車より
通^{とほ}り給ふことに⁵⁴、ついふるまひて、奉^{たてまつ}れ侍るに⁵⁵、取りて見給ひ、「承^{うけたまは}りぬ。
今、家にまかりて、御返^{ごへん}り聞えん」との給ふ。大学に入り^{だいがく}にけり。殿に帰^{かへ}り給ひ
て⁵⁶、御娘三人おはしけり、大君に、「しかじかのことなむある。いかに」と聞
え給へば、怨^あじて、泣^なきて入^いり給ひぬ。中の君、同^{おな}じ事聞え給ふ。三の君に聞
え給ふ。「ともかうも、仰^{おほ}せ言^{こと}にこそ従^{したが}はめ」との給へば、いと清^{きよ}げに寝殿造^{しむてむつく}り
て、よき日^ひして呼^よび給ふ。御消息^{ごせうそく}⁵⁷ ありければ、いと悲^{かな}しう、橡^{つるばみ}の衣^{きぬ}⁵⁸ やれ
困^{こう}じたる着^きて、てりゐたる⁵⁹ 沓履^{くつは}きて、ふくめる文^{ふみ}のなく⁶⁰ 取りて、来^とにけり。
帳^{たう}の内に入^{うち}りて、まづこの文卷^{ふみまき}を賜^{たま}へれば⁶¹、取り給はねば、篁^{たかむら} 差^さして行^いけば、
この君、皮^{かは}の帯^{おび}を取りて、引^ひき止^とめ給へば、止^とまり給ひにけり。これを垣^{かい}間^ま見て、
父^{ちち}大臣^{おと}、見^み給ひて、「いとかしこうしつづ」と喜^{よろこ}び給ふ。「出^いでて往^いなまし。いかに
人^{ひと}聞^ききやさしからまし。いとかしこきことなり」と喜^{よろこ}び給ふに、一日^{いちにち}の夜^よ⁶²、い
といかめしうして⁶³ 待^{まち}ち給ふ。ただ童^{わらは}一人ぞ具^くし給ひける。

二 女の靈魂とそれを知った妻

さて、この頃^{ころ}、妹^{いもうと}のある屋^や⁶⁴ に行^いきたりければ、いと悲^{かな}しかりければ、寝^ねにけり。
妹^{いもうと}、

〔女〕見^みし人^{ひと}にそれかあらぬかおぼつかなもの忘れ^{わす}せじと思^{おも}ひしものを
と言^いひければ、かの殿^{ひさ}にもいかでぞ泣^なきをりける。久^こしう来^きねば、大殿^{おほ}⁶⁵、「あやし」
とおほしけり。七日^{なな}ばかりありて、来^きたり。「なか見え給はざりける」との給へば、
素^す直^ななりける人^{ひと}にて、こと隠^{かく}して言^いひければ、妻^め、「いとあるべかしき事^{こと}にて、
あはれの事^{こと}や。我がためにも、さらずはおはせめ、わいてもこそは、むかし人^{ひと}は
心^{こころ}も容^{かた}姿^{たち}も、さものし侍^わりければ⁶⁶ こそ、年^{とし}を経て、え忘れ^{わす}れがたくし給^{たま}ふらめ。
さる人^{ひと}を見^み侍^わり⁶⁷ けんに、言^いひ知^しらで見え奉^{たてまつ}るよ。後^{のち}の世^よいかならむ。

〔三君〕飽^あかずして過^すぎける人^{ひと}の魂^{たましひ}に生^いける心^{こころ}を見^みせ侍^わる⁶⁸ らむ
あな、はづかし」との給ふに、男^{おとこ}、「なにか、それはおほしめす。かくては、果^は
てはえ知^しろしめさじ。御^ご魂^{たましひ}のあるやうも見るべく、試^しみにさへなり給はぬ」とて、

〔篁〕別^{わか}れなばをのがたまたま⁶⁹ なりぬともおどろかさねばあらじと思^{おも}ふ
出^いでてまかりしを引^ひき止^とめて、今^{けふ}日までさぶらはせ給ふ。うるさしかし」と言^いひ
ける。

三 篁という人

この男^{おとこ}は、若^{わか}き間^{あひだ}は、いと懇^{ねむこ}ろに見^みえて⁷⁰、他^{ほか}に夜^よ離^がれなどもしけり。なり出^い

でて、宰相^{さいさう}よりも上^{かみ}になりにけり。これなむ名^なに立つ^た臺^{たかむら}なりける。才覚^{さいかく}はさら
 にもいはず、歌作^{うたつく}る⁷¹ことも得^えたり顔^{かほ}に、この国^{くに}の人にはたへずぞ⁷²ありける。
 このこむ^{傍記ら}このこて⁷³、かく歌詠^{うたよ}まぬはなかりけり。聞き給^{きたま}はざりし姉^{あね}二所は、
 いとわろき人^めの妻^めにて、この御徳^{とく}を見給^{みたま}ひける。いとよくなり出^いでければ、この
 三^{さん}の君^{きみ}を、また二^{ふた}なくもてかしづき奉^{たてまつ}る。今^{いま}の人^{ひと}、まさに大学^{がく}の衆^{しゆ}を、婿^{むこ}に取る^と
 大臣^{だいじん}もあらむや。ただ、心高^{たか}き才^{さい}⁷⁴劣^をり給^{たま}ふなるべし。またあらじかし、かや
 うに思^{おも}ひて、文作^{ふみつく}る人^{ひと}は。

< 註 >

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 彰考館本「さえ」 | 26 彰考館本「おもひて」 |
| 2 彰考館本「むつまじからん」 | 27 彰考館本「なかうと」 |
| 3 彰考館本「て」 書陵部本「ちり」 | 28 彰考館本「ゆるされたまはては」 |
| 4 彰考館本・書陵部本「かくひち」 | 29 彰考館本「しゝたれと」 |
| 5 彰考館本「一首」 | 30 彰考館本「おもひくさなや」 |
| 6 彰考館本「さき」 | 31 彰考館本「やらぬ」 |
| 7 彰考館本「おとこきて」 | 32 彰考館本「はいゝり／＼たりけれと」 |
| 8 彰考館本・書陵部本「かくひち」 | 33 彰考館本「むかひみたりければ」 |
| 9 彰考館本「かやう初のふみ」 | 34 彰考館本「見てさめて」 |
| 10 彰考館本「ひとしれす」 | 35 彰考館本「みて人／＼いふ」 |
| 11 彰考館本「おなしいう」 | 36 書陵部本「をしみて」 |
| 12 彰考館本「ませ」 | 37 彰考館本は「人／＼」を欠く |
| 13 彰考館本「いとおかしかりて」 | 38 彰考館本「にたりとや」 |
| 14 彰考館本「はかり」 | 39 彰考館本「いたりたへき」 |
| 15 彰考館本「かしは車」 | 40 彰考館本「くいつきやに」 |
| 16 彰考館本は「載せ奉りて」を欠く | 41 彰考館本「こゝろまとひて」 |
| 17 彰考館本「屏」 | 42 彰考館本「身こそはいに」 |
| 18 彰考館本「身」 | 43 彰考館本「夢のたましゐ」 |
| 19 彰考館本「くれぬれは」 | 44 彰考館本「まとゐて」 |
| 20 彰考館本「あたきねすゑぬ」 | 45 彰考館本「なきまとへと」 |
| 21 彰考館本「ありにし」 | 46 彰考館本「ようさり」 |
| 22 彰考館本「ところ」 | 47 彰考館本「ならんやうもしす」 |
| 23 彰考館本「お給へりしか」 | 48 彰考館本「あはの山」 |
| 24 彰考館本「しは／＼」 | 49 彰考館本「夜のあけにけれはなし」 |
| 25 彰考館本「うちいていけ」 | 50 彰考館本「たゝこのせうと」 |

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 51 彰考館本「たましゐなん」 | 63 彰考館本「いかめしうて」 |
| 52 彰考館本「四七日は」 | 64 彰考館本「ありしやに」 |
| 53 彰考館本「ひえの三味堂にて」 | 65 彰考館本「大臣殿」 |
| 54 彰考館本「とりたまふとに」 | 66 彰考館本「さもののし給ければ」 |
| 55 彰考館本「たてまつれたふに」 | 67 彰考館本「たまひ」 |
| 56 彰考館本「かへりて」 | 68 彰考館本「たまふ」 |
| 57 彰考館本「せうそく」 | 69 彰考館本「さま／＼」 |
| 58 彰考館本は「きぬの」を欠く | 70 彰考館本「あはて」 |
| 59 彰考館本「しりゐたる」 | 71 彰考館本「山たつる」 |
| 60 彰考館本「ちゝ」 | 72 彰考館本「たらすそ」 |
| 61 彰考館本「たてまつれは」 | 73 彰考館本「このこんまうのゝこて」 |
| 62 彰考館本「三日の夜」 | 74 彰考館本「こゝろかたちさい」 |